

<b>Title</b>	欧陽予倩と広東戯劇研究所(中)
<b>Author</b>	松浦, 恆雄
<b>Citation</b>	人文研究. 47 卷 3 号, p.263-281.
<b>Issue Date</b>	1995
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

## 欧陽予倩と広東戲劇研究所（中）

松 浦 恆 雄

### 三、芸術話劇運動

南国社の広州での公演を実現させたのは、広東戲劇研究所の所長に迎えられた欧陽予倩であった。まず、南国社の公演に至る経緯を略述しておきたい。

欧陽予倩と田漢とは、一九二四年頃から密接な交流を持っており、「新興戲劇運動に従事するには、我々のどちらも欠かすことはできない<sup>(1)</sup>」<sup>(1)</sup>と思うほどになっていた。南京での国民劇場の設立（二七年八月）、上海芸術大学戲劇系の設置（同年十一月）、南国芸術学院の創設（二八年二月）など、欧陽予倩は、田漢からの呼びかけには、常に積極的にかかわってきた。二七年末に、田漢が主宰する南国電影劇社を南国社に改組し、その章程を決めたのも、欧陽予倩と徐悲鴻との相談の結果であった<sup>(2)</sup>。この時期の二人は、正に「我々のどちらも欠かすことはできない<sup>(2)</sup>」<sup>(2)</sup>ような二人三脚で演劇活動を展開していたのである。すでに広東行きが決まっていた二八年十一月に開かれた「新南国成立大会」<sup>(3)</sup>では、欧陽予倩は、大会の執行委員まで務めている<sup>(3)</sup>。広東戲劇研究所での人事も、南国社の人脈に依る

所が大きく、研究所の劇務主任には、二九年一月下旬に急遽、南国社の主要メンバーの一人である唐槐秋を呼び寄せ、演劇学校校長には、上海戲劇協社を脱退して、南国社に参加したばかりの洪深に白羽の矢を立てた。<sup>(4)</sup>

歐陽予倩は、広東到着後、田漢に幾通もの手紙を書いて、「個人」のためではなく「事業」のため、田漢に「開場鑼鼓」をたたきに広東へ来てもらいたいと要請している。<sup>(5)</sup> 広州に戲劇運動の確固とした拠点を作り上げれば、上海と連動して、一層速やかに全国に戲劇運動を展開できるとの思いからであった。<sup>(6)</sup> 田漢と洪深は、二九年一月末、歐陽予倩の要請に応え、上海の新閩碼頭からドイツの郵便船「Frier」号に乗り、香港経由で広東入りする。<sup>(7)</sup> 南国社の一部の社員も、田漢からの電報に応じ、二月十九日に上海を出発し、二月二八日、広州着。広州入りしたのは、唐叔明、艾霞、黄大琳、呉家瑾(以上女性)、左明、田洪、徐志尹、趙銘彝、宋小江、左天錫の十名であった。<sup>(8)</sup> 陳凝秋、呉似鴻の兩名も同行の予定であったが、ちょうど狂飆社の赴京公演の応援に借りて行かれて、広州入りがかなわなくなったという。<sup>(9)</sup> 公演には、彼ら(すでに広州入りしていた万籟天等を含む)のほか、研究所側からも歐陽予倩、洪深、唐槐秋、嚴工上等が参加し、公演の全責任は、田漢が負うこととなった。<sup>(10)</sup>

三月二日には、公演場所(大佛寺国民体育会)、日程(三月六日からの一週間、初日は広州各界人士を招待し、七日から正式公演)、チケットの代金(一元、二元、学生は半額)までが決まり、五日の『廣州民国日報』の第二面には、三段抜きで「南国新話劇部旅粵公演」の広告が掲載され(六日の広告は「南国社」と訂正)、創作劇七本、翻訳劇三本、歌劇二本の計十二本の上演が予告された。舞台監督は、田漢、舞台装置及び照明は、田洪、邵知焯の担当である。<sup>(11)</sup> では、「南国社話劇部旅粵公演」の公演演目を以下にまとめておく。<sup>(12)</sup>

- 3月6日：(一) 古潭的声音(一幕詩劇、田漢作) (二) 生之意志(一幕喜劇、田漢作) (三) 車夫之家  
 (一幕社会悲劇、歐陽予倩作、粵語上演) (四) 湖上的悲劇(一幕悲劇、田漢作) (五) 蘇州夜話

(一幕社会悲劇、田漢作) (六) 刺虎(崑曲、歐陽予倩上演)

7日：同右

8日：(一) 顛慄(一幕社会悲劇、田漢作) (二) 未完成之傑作(三幕悲劇、孫師毅訳) (三) 空与色

(二幕悲劇、歐陽予倩訳、粵語上演) (四) 蘇州夜話

9日：(一) 強盜(一幕喜劇、田漢訳) (二) 空与色 (三) 生之意志 (四) 名優之死(三幕悲劇、田漢

作)

10日：(一) 人面桃花(三幕歌劇、歐陽予倩作、上演) (二) 音楽(敲工上、方航僧等) (三) 刺虎

11日：(一) 古潭的声音 (二) 生之意志 (三) 未完成之傑作 (四) 湖上的悲劇 (五) 車夫之家 (六)

蘇州夜話 (七) 名優之死

あらかじめ予告されていた演目のうち、歐陽予倩「屏風後」が、田漢「古潭的声音」に変更された外は、すべて予定通り上演された。開演時間は、三月六日から十日までが、午後八時、十一日だけ午後七時である。演目表を見ればわかるように、六、七日と十一日は、ほとんどが一幕物とは言え、演目数が多く、上演は相当長時間に亘ったと思われる。また、南国社の人手が足りず、化粧や背景幕の準備にも手間取ったらしい(M)。事実、初日は、終演が翌日の午前一時となり(M)、やむなく「蘇州夜話」まででひきあげた観客もいた(L)。最終日の開演時間が一時間早まっているのは、初日以上の演目数のため、開演時間を繰り上げざるを得なかったのであろう。次に、確認できた範囲で、各演目の出演者と配役を記しておく。<sup>(13)</sup>

古潭的声音：万籟天(詩人)(K)

生之意志：唐槐秋、左明、艾霞、万籟天(K)

蘇州夜話　：唐槐秋、唐叔明、艾霞(K)

湖上の悲劇：万籟天、唐叔明(弟)、左明、吳家瑾(白薇)(K、M)

未完之傑作：洪深(画家唐那迭)、唐槐秋(第六号囚人)(N)

名優之死　：洪深(劉振声)、唐槐秋(楊大爺)(ロ)

顛慄　　：洪深(精神病之子)(ロ、ヘ)

車夫之家　：中山大学呼喚社(歐陽予倩「用粵語演話劇」)

空与色　　：中山大学呼喚社(同右)

公演の観客は、例えば、初日の観客約二百のうち、百三十余が中山大学の学生であった(M)という事実からも伺われるように、そのほとんどが学生とマスコミ関係者で占められていたようだ。のちに『広州民国日報』副刊「雷雨」の編集を担当することになる中山大学の時代芸術研究社は、演劇に強い関心を示し、特に南国社に要請して、三月十六、十七の両日、中山大学大礼堂での追加公演を実現させた。両日とも午後七時から十一時まで、すでに上演された南国社のレパートリーの外に、更に「強盜」と「往何処去」の新劇を加えた公演で、歐陽予倩の歌劇や戲劇研究所音楽隊の演奏も予定されていた。その時上演された「名優之死」では、名優の劉振声役を演じていた洪深が上海に帰ってしまったので、田漢自らが演じるというおまけまでついた(ヌ)。

概略ほぼ以上のような南国社の公演は、では、はたして歐陽予倩が期待したように、「開場鑼鼓」を音高く鳴り響かせることができたのであろうか。広州の人々の反応を、当時の劇評などを手掛かりに確かめてゆきたい。

広州では、演劇と言えば、やはり伝統演劇である粵劇を指す。白話劇が一時活発に活動した時期もあるが、やがて粵劇に吸収されたり、所謂文明戲として命脈をつなぐことになるのは、前章において既に見た通りである。白話

劇は、近代的な話劇に脱皮する機会のないまま、二七年、蔣介石の四・一二クーデターによる文化界の異様な沈滞ムードの中、ますます窮地に立たされることになる。

こうした状況の下、南国社の短期公演が、広州の言葉の壁と観劇趣味の壁を乗り越えて、どこまで観客に訴え得たのかは、公平に見て、やはりはなはだ疑問とせねばならないであろう。言葉について言えば、南国社の俳優の用いる言葉は、官話（或いは地方なまりを帯びた）が主であり、広州の一般の人々には、恐らくチンブンカンブンであつたはずである。つい数年前までの香港では、国語が全くと言っていいほど通じなかつた事実を想起していただければ、事態の深刻さは容易に理解されよう。また、母語（方言）ではない言語（官話）によるためか、セリフまわしの平板さも、演劇的效果を殺ぐものとして、しばしば指摘されている（P、M）。言葉の障害を和らげるため、南国社の劇がなかつた十日を除いて、毎日一本は広東語による話劇公演が行われていたことも、注目に値する。これは、欧陽予倩が、地元の学生を用い、自らの脚本を監督したものである。

言葉の壁同様、観劇趣味の壁も乗り越えがたかつたようだ。文明戯のように純粋娯楽を目的とする白話劇以外の白話劇は、当時すでに社会から隔離された、ごく一部の知識人層の文化活動としての意味しか持ち得ぬものになつていた。「広東では近年白話劇は全く顧みられず、時に学校で、記念会や遊芸会の折に一二演じられるだけである。それは学生たちのものである。」（Q）と記されるが如くである。「今の青年は次第に文学がわかるようになり、文学が青年たちの精神生活に欠かせぬ糧となった」（O）とは言え、中山大学の時代芸術社のメンバーのような積極分子は、大学生間でも例外的存在であつたと思われる。南国社の話劇について、真剣に議論をする者に、「君は随分な熱の入れようだが、では何人が南国社の劇を見たと言うんだ」（U）というのが実情であつたようである。関係者による後年の回想では、公演は毎回満員の盛況であつたかのごとくに記され（ト、ヌ）、当時の新聞も、「兩日

(六、七日一引用者注)とも各界の観客は数百名に上り、座席は満席となった(K)と報道している。しかし、会場である国民体育会の定員は、七百(ト)とも、一千以上(ロ、ヘ)とも言い、観客数の方は、初日でさえ二百であった(M)という報告もあることから考えれば、実際には、会場はガラガラに近い状態であったと思われる。観客の不入りは、馬師曾や陳非儂(いずれも粵劇の名優)のことしか頭にない観客層を考えれば、事前に十分予想のついたことでもあった(M)。

しかし、にもかかわらず、南国社の旅粵公演は、少ないながらもその観客に、話劇が十分鑑賞に耐える芸術性を備えたものであることを証し、あるべき話劇の姿が南国社の努力する方向にあることを確信させたのであった。彼らにとっては、恐らく南国社の如き、演劇の訓練を積んだ俳優の演じる話劇を見るのは、初めてのことであり、舞台装置や照明、音響効果を駆使した舞台を見るのも、初めての経験であった(L、T)。特に舞台装置と照明には、工夫を凝らしたようで、「南国狂」(ロ)を産む原因ともなった。

南国社の話劇は、洪深がそのパンフレットに記した如く「劇を見るのは、人生をよく知ることだ」(L)に代表される、素朴なりアリズム演劇観に支えられており、良くも悪くも、詩的なセリフと少しセンチメンタルな抒情が、その特色であった。題材に採られた社会問題も、こうした田漢特有の糖衣にまぶされて、観客を無理なく思索に導いていったのである。

広州の観客は、舞台上に展開するストーリーや俳優のセリフを通して、間近に人生を見つめ、真剣に社会について考えるという体験を、恐らく、初めて持ったに違いない。ある者は、翻訳劇「未完成之傑作」を見た後で、「自己の奥深くに潜んでいる精神の傷や心に鬱積し絡まる悲しみが、皆意識の表面に現れ、ために涙し、心中の苦悶や悲しみが洗い清められ、解放されたような慰めを得た」と言い(N)、「あたかも舞台の上に人生を、自分の生活を

発見し、しかも自分の中にも演劇と同様の快感を発見する、そして最初は緊張していた精神が、涙でリラックスし、軽やかで愉快的幻想幻覚の境地に誘い込まれ、夢の世界に浸透してゆくかの如くであった」とも言う(N)。またある者は、初日の舞台がはね、深夜、帰宅の途上、「私の感情、思想が、確かに、幾らか高尚に、幾らか偉大になり、そして人生に対する知識や知恵も幾らか増した」と感じたのであった(M)。これらの感想は、誠に素朴ではあるが、優れた舞台に接した際に、誰もが感じる精神の興奮状態をよく伝え得ていると思う。こうしたことから見ても、少なくとも、南国社の舞台には、観客にある種のメッセージを伝えようとする強い意志が漲っていたことだけは、理解できるのである。「広州の演劇界は、確かに大きな刺激を受け、風向きも変わったようだ」(L)と感じ、自らの理想とする演劇からほど遠からぬ地点に南国社の演劇があると考えた者がいたのも、決して偶然ではなかったであろう。

当時の話劇批評の基準は、一般に、仮構の舞台からいかに実人生(或いはその問題点)を感じ得るかという点であり、勢い、最も人の注意を引き、批評の対象となりやすいのは、ストーリーや言葉遣いの自然、不自然であった。広州における批評も、ほぼそうした旧套を襲っている。

まず、ストーリーについては、偶然の出会いによるストーリーの展開が都合主義に過ぎる点や、「湖上の悲劇」のヒロイン白薇が拳銃による致命傷を受けながら延々と思いを述べるなど、常識的には考えにくい場面設定に不満が集まっている<sup>(15)</sup>(L、N)。また、言葉遣いでは、精神病患者とその母親(「顛慄」)、花売り娘(「蘇州夜話」)、別荘守りの老人(「湖上の悲劇」)などの用いる言葉が、その身分を離れて、あまりに詩的、哲理的であり、知識人しか用いない言葉で書かれている点(L、N)、更に詩的なセリフのエロキューションにも十分な注意を払うべき点(M、P)などが指摘された。



粵劇の演技との相違を指摘した批評もある(T)。表情の細やかさ、対話の緊密さ、背景幕の使用などの点において、南国社の優位が指摘されているが、最も両者の違いを浮き彫りにするのは、粵劇の俳優は自らの個性をもつて劇中人物の個性を代表させているが、南国社では、俳優が劇中人物の個性を十分に演じていた、という点である。この指摘は、俳優が演劇に取り組む姿勢の相違を如実に反映しているよう。つまり、俳優は、自分の技芸を見せるために演じるのか、劇を見せるために演じるのか、という相違である。この相違が、ひいては、台本の整備、監督制の確立といった演劇の近代化を経たか否かの分岐点ともなる。恐らく、粵劇と同様のことが、当時の広州の白話劇社の多くにも当てはまったのではないかと思われる。

興味深いのは、春柳社と南国社との比較を行っている批評のあることである(O)。春柳社は、白話劇を公演した中国最初の劇団(正確には、春柳社演劇部)であるばかりでなく、当時最も芸術性の高い白話劇を演じた劇団でもあった。官話を用いた白話劇は、春柳社に始まる。評者には、明らかに、近代話劇の系譜の中に、両者を位置づけようとの意識が働いていたと思われる。このことは、広州に、この系譜を継ぐべき話劇運動が起こることへの熱い期待でもあったであろう。

南国社は、無事公演を終え、四月九日の船で上海へ戻って行った<sup>(16)</sup>。南国社の公演は、実は、上述したように、ごく一部の学生や知識人層への影響だけではなく、広州の人々に「馬師曾、陳非儂以外にも芸術家がいることを知らしめ<sup>(17)</sup>」、「広州の戲劇運動は一般人士の興味を引く所となった<sup>(18)</sup>」のであった。こうした余勢をかって、南国社社員の内には、上海に戻らず、そのまま広州に残る者も多く出て来た。ほどなくして、南国社の居残り組と広州の演劇愛好家による劇団が組織され、芸術話劇運動を展開することになる<sup>(19)</sup>。南国社の左明、万籟天が中心となり、同じく南国社の宋小江、白英(女)(ロ)、及び金工(時代芸術社)、司徒金(舞台装置)、司徒璧(改良戲劇研究会子隊幹事)<sup>(20)</sup>兄

弟、李麗蓮（女）、李化、許鑑民、黃夢蘭（女、俳優）、万籟天（武術家）、方興などによる光明社である。彼らは、五月二十四、二十五日、南国社と同じく国民体育会を借りて公演を行った。

光明社に集まった人々は、南国社の話劇に飽き足りない所があったようで、宋春舫の紹介したイタリア未来派の「早已過去了」、<sup>21</sup>「朝秦暮楚」や左明が創作した未来派劇「愛」を上演演目を選んだ。特に「愛」は、新奇な背景幕の製作を司徒金に依頼していたという。これらの外に、万籟天の「期待」と金工の「海外悲劇」が上演を予定されておられ、「海外悲劇」では、劇中にスペイン舞踊が挿入されることになっていた。また、この公演では、幕間に、古典音楽の演奏（李麗蓮「紅豆子」）や「比劍」（劍の試合）、「舞劍」（劍舞）が演じられたらしい。これらは、観客が心に描くイリュージョンに頼ってリアリティーを形成するリアリズム演劇の常套を、バロック的な要素の導入によりぶち壊し、未来派演劇に対する違和感を緩和しようとする、巧妙な仕掛けなのかも知れない。しかし、意地悪な見方をすれば、ほとんど理解者を期待できない未来派演劇の公演のための、単なる人寄せ、客つなぎの具にすぎないとも言えよう。光明社の芸術話劇運動からは、芸術的であろうとする気負いと危うさとが、二つながらに透けて見えてくるようである。

光明社の演劇活動は、この旗揚げ公演の記事以降、杳としてその足取りをつかむことができなくなる。六月六日には、その中心人物であった万籟天、左明をはじめ、宋小江、李化、白娥（女）が上海へ渡っていった。万籟天と左明とは、南国社の公演に駆けつけるためだという。<sup>22</sup>こうした光明社の人々の動きからすると、光明社は、旗揚げ公演だけで解散した可能性も高い。上海の南国社から広州の光明社へと移植された芸術話劇の流れは、その後、広東戲劇研究所演劇学校の話劇公演が受け継ぎ、広州における学校劇の隆盛を準備することとなるのである。

#### 四、広東における戲劇管理

広東における戲劇改革の基地であった広東戲劇研究所は、実は、広東国民党政府による党化芸術政策の一環として設けられたものであった。研究所は、あくまで国民党政府の政策宣伝の具としての役割を期待され、かつその方向での白話劇、粵劇の改革の任を、欧陽予倩は、任されたのであった。無論、演劇の芸術性の向上も図られたわけだが、それは工具としての機能の向上に結びつくが故であり、その一点において、欧陽予倩も、演劇運動を積極的に展開する上での有効性を見出だしていたはずである。また、広東省政府は、戲劇研究所と同時に、両広国術館の設置も決めていることから、芸術や武術の発揚が、革命の策源地広東の文化生活の豊かさや伝統文化への重視を対外的に示すことにもなると考えたのであろう。

本章では、広東国民党政府による、広東戲劇研究所の成立に至るまでの、戲劇管理の状況をごく簡単に整理しておきたい。

広州では、一九二〇年に市督学局が成立以来、局員を直接各劇場に派遣し、実地監視による戲劇管理が行われてきたが、教育局に改組されてからも、同様の方法が踏襲されてきた。<sup>(23)</sup> 取り締まりの主要な対象は、良俗を害する「淫劇」の取り締まりであった。<sup>(24)</sup> 一九二六年三月、ようやく教育局の下に戲劇審査委員会という専門の組織が誕生する。当時の教育局局長伍大光が、市内の新旧演劇専門家、映画制作者、演劇批評担当の記者を招聘し、彼らを義務会員として発足。<sup>(25)</sup> 同年六月には、映画取り締まり条例と新旧戲劇取り締まり条例が制定される。<sup>(26)</sup> 新旧戲劇取り締まり条例が新聞紙上に公開されたのは、翌二七年二月のことであるが、<sup>(27)</sup> それによると、禁演条項は六つある。(一) 党義に反するもの、(二) 国体を辱めるもの、(三) 人道に背くもの、(四) 風紀を損なうもの、(五) 婦女を蔑視するもの、(六) 進化を阻害するもの、である。これまでの取り締まりの対象は、主に(四)や(五)であった

わけだが、この条例では、全面禁止措置を取れる最も厳しい違反条項が、(一)と(二)になっている。特に(一)は、容易に言論統制に口実を与えるものと言え、これまでの戲劇管理にはなかった点である。さて、戲劇審査委員会の各委員は、劇場フリーパスの視察証を配布され、視察後、報告表を提出するという形で審査が行われることになった。後には、各委員の受け持ち劇場なども細かく定められ、毎週の報告義務も課せられる。この審査委員の報告に基づき、例えば、「点崔子弑斉君」、「呂布窺粧」、「宝蟬進酒」<sup>(28)</sup>や「余美顔投江記」<sup>(29)</sup>など多くの演目が、禁演になっている。

戲劇審査委員会は、二八年二月に改組され、影戲股、鑼鼓戲股、雜戲股の三股に分かれて、それぞれの審査条例が作成された。<sup>(30)</sup>翌二九年八月には、更に審査体制の強化のため、党部宣伝部、市教育局、市公安局が合同で組織する、広州市戲劇審査委員会に改組され、組織規程十一条が制定されるに至る。<sup>(31)</sup>これまで民間人を多く登用してきた委員には、各部、局からしかるべき人選をして組織することになった。新組織による審査は、十月一日より開始され、審査委員による禁演措置も、続けられている。<sup>(32)</sup>

一方、省レベルでの戲劇管理も行われることになった。省政府の姿勢を最もよく示すものが、一九二八年十一月二十七日、省政府の会議において決定された広東省教育庁改良戲劇規程、広東全省戲劇改良委員会組織章程、劇社戲班及電影公司立案章程である。<sup>(33)</sup>改良戲劇規程は、ほぼ戲劇審査委員会の取り締まり条例の内容を襲ったもので、それを広東全省に施行範囲を広めて実行するのが戲劇改良委員会である。立案章程は、省内のあらゆる劇団、映画会社を登録させ、その存廃を管理しようとするものである。

こうした戲劇審査、管理とは別に、新しい戲劇建設を目指して組織されたのが、改良戲劇研究会である。教育局長伍大光等の発議によって、その準備作業が始まり、(一)戲劇学校の設立、(二)戲曲小書庫の設立、(三)劇本

の編纂校訂、(四) 劇社の組織、(五) 戯劇画報の発刊、(六) 劇員の社会的地位の向上と劇員の知識と技能の増進、(七) 各劇本の内容の審査及び誤りの訂正、(八) 劇員が戯劇に関する一切の困難を解決するのを援助する、の八項目を主要任務に据えた。<sup>(34)</sup> 一九二九年の年頭に発表された、教育庁長黄節「一年来広東之教育」には、この研究会は、「戯劇改良を研究し、戯劇の人材を養成、党と国の宣伝を補助し、社会教育を促進する」<sup>(35)</sup>ことが謳われ、党宣伝のための劇団養成という性格を明確にしている。改良戯劇研究会は、五月四日に、正式な成立大会を開き、二晩にわたって祝賀の遊芸大会を催し、<sup>(36)</sup> 九月三日には、夜学の演劇学校である劇芸班の開学式典を行った。<sup>(37)</sup> しかし、研究会設立のための本格的な準備作業に入ってもなく、広東省長李濟深による広東戯劇研究所の設立が決定され、研究会の主な任務は、実質的には研究所のほうに引き継がれる形となった。そのため、研究会の活動は、経費不足のためもあってか、影が薄く、様々な事業の提案に終わることが多かった。実際に開設された劇芸班も、その成果を伝える記事は見当たらないままである。

ただ、改良戯劇研究会の設立準備が、一九二八年十一月であったというのは、決して偶然ではないことに注意しておきたい。国民党の第二期五中全会が開かれ、国民革命が訓政時期に入ったことが公布されるのが、一九二八年八月。同年十月には、「訓政綱領」が中央常務会議を通過し、国民党は、国民が政権を行使し得るよう「訓練」することになった。「訓練」の一環に、党化教育があるの言うまでもなく、党義宣伝のため、演劇にも本腰を入れるのである。それが、単なる規制による戯劇管理から、積極的な演劇建設に向かわせた根本原因であろう。「帝国主義打倒を『叫ぶだけ』だったり、舞台上でピストルを鳴らして血を流す類いのもの」を「革命脚本」として、「大笑いの種になった」過去の杜撰さが指摘されたのも、同じく二八年双十節のことであった。<sup>(38)</sup> 翌二九年七月には、中央宣伝部が、「芸術宣伝辦法」七条を公布し、<sup>(39)</sup> 国民党員による革命宣伝の劇団である民声社も結成される。<sup>(40)</sup> 改良

戲劇研究会の劇芸班の開学式典は、この約一カ月後のことなのである。

こうした党化芸術の流れを追ってゆくと、その行き着く先に、広東戲劇研究所の姿が見えてくる。広東戲劇研究所は、実際に、党化演劇を製作し、かつ上演も行っている。例えば、二九年十一月には、広東反俄宣伝週のため、「黒龍江之鬼」や「傷兵之妻」といった演目を上演している<sup>(41)</sup>。また、党化演劇と言えないかも知れないが、広州市風俗改革会からの要請を受けて、三〇年の元旦に、風俗改革に関係する芝居の上演を約している<sup>(42)</sup>。こうした活動は、研究所の活動のごく一部に過ぎないかも知れないけれども、研究所にとっては、欠くことのできない活動であったことを押さえた上で、広東戲劇研究所の果たした役割を考えてゆかねばならないであろう。(待続)

### 〔注〕

- (1) 田漢「數千里路雲和月」(『田漢散文集』今代書店 一九三六、匯文閣書店影印 所収)。
- (2) 田漢「我們的自己批判」(『田漢專集』江蘇人民出版社 一九八四)。ただし、徐伯陽・金山合編『徐悲鴻年譜』(芸術家出版社 一九九二)は、一九二八年一月中旬のこととする。
- (3) 『田漢年譜』(中国戲劇出版社 一九九二)一一三頁。
- (4) 黒鹿「劇芸社の三個女社員」(上海『民国日報』民18・1・4)、陳美英編著『洪深年譜』(文化芸術出版社 一九九三)二七、二八頁。
- (5) 閻折梧「南国在南国」(『南国的戲劇』萌芽書店 一九二九 所収)。
- (6) 欧陽予倩「粵遊瑣記」(『南国月刊』第一卷第一期 一九二九年五月)、のち『南国月刊彙刊』第一卷上冊(現代書局 一九三〇年三月 実藤文庫蔵)所収。

(7) 田漢「廣州印象記」(『廣州民國日報』「以下『広』と略」「晨鐘」第一九一期 民18・2・21)、『田漢年譜』(前出)一二〇頁。

(8) 「南国演員聯袂來粵」(『広』民18・3・1)、「南国社公演話劇」(『広』民18・3・2)。後者は、左天錫を外して九名だとするが、田漢「南国來矣」(「戲劇研究」第三期、『広』民18・3・2)は、南国社の一行に左天錫の名を記しているので、前者に従っておく。

(9) 「南国社赴粵演劇」(『申報』民18・2・23)、「南国游蹤」(上海『民國日報』民18・3・14)。

(10) 「上海南国社來粵演劇」(『広』民18・2・28)、「南国社公演話劇」(『広』民18・3・2)。

(11) 「広東戲劇研究所撥定地址」(『広』民18・1・31)。邵知帰は、上海芸術大学の出身で、天蟾舞台や第一舞台といった上海の一流の劇場の舞台装置を手掛けた気鋭である。

(12) 「第一二日南国社公演演目」(『広』民18・3・5)及び南国社話劇部旅粵公演廣告(『広』民18・3・5、6)。

尚、以下、次の資料からの引用は、略号によって本文中に記す。

J 天錫「読『湖上の悲劇』」(『広』「晨鐘」第二〇〇期 民18・3・8)

K 「南国社公演話劇之第一二日」(『広』民18・3・9)

L 無為「南国社給我的印象」(『広』「現代青年」第二〇三号 民18・3・9)

M 金工「談『南国』」(『広』「晨鐘」第二〇一期 民18・3・11)

N 厂樵「『未完成之傑作』及其他」(『広』「晨鐘」第二〇二期 民18・3・12)

O P.K. 「兩個時代的演劇(統)」(『広』「現代青年」第二二三号 民18・3・18) (『広』「現代青年」第二二二号の頁

は欠号)

- P P. K. 「兩個時代的演劇(統完)」(『広』「現代青年」第二二四号 民18・3・19)
- Q 健庵「談談南国社の劇(一)」(『広』民18・3・18)
- R 健庵「談談南国社の劇(二)」(『広』民18・3・19)
- S 健庵「談談南国社の劇(三)」(『広』民18・3・20)
- T 健庵「談談南国社の劇(四)」(『広』民18・3・21)
- U 健庵「談談南国社の劇(五)」(『広』民18・3・22)
- イ 左明「南国到南国」(『南国的戲劇』前出)
- ロ 折梧「南国在南国」(『南国的戲劇』前出)
- ハ 「關於湖上的悲劇底討論」(『南国的戲劇』前出)
- ニ 「關於民衆的戲劇底討論」(『南国的戲劇』前出)
- ホ 「廣東戲劇研究所的現在与将来」(『戲劇』第二卷三・四期 一九三二年二月)
- ヘ 閻折梧「『南国』播種到南国」(『廣東話劇運動史料集』第一集)
- ト 鍾啓南「哀思不尽憶芳華」(同右)
- チ 陳西名「廣東戲劇研究所的前前後後」(同右)
- リ 陳西名「憶兩個『廣東戲劇研究所』」(同右)
- 又 盧敦「廣東戲劇研究所成立前後の戲劇活動」(『廣東話劇運動史料集』第二集)
- ル 葛芸生、盧嘉「歐陽予倩在廣東」(『戲劇藝術資料』第六期 一九八二年三月)
- (13) 嚴肅「南国社史論」(『中国話劇史料集第一輯』文化藝術出版社 一九八七 所収)の配役表は、第一回公演のものを田漢



「我們的自己批判」から写して来ただけで、広州公演の実際とは異なる。公演演目に嚴肅が「父婦」を、トが「南婦」を挙げているのは誤り。

(14) 「南国社在中大演劇」(『広』民18・3・16)。但し「強盜」は九日に上演済みである。

(15) 日本演劇であれば、『忠臣蔵』の勘平腹切りの場や、『伊賀越道中双六』の千本松原の段などをすぐに思い浮かべるのだが、中国演劇では、類似した場面設定を持つ演目が見当たらないように思う。田漢は、「獲虎之夜」においても、瀕死の重傷を負った主人公に、延々と内心を語らせている。こうした特殊な場面設定は、日本留学中によく芝居小屋に通っていたという田漢が、日本の古典演劇から学んだ手法ではなからうか。

(16) 『田漢年譜』(前出) 一一二頁。

(17) 金工「金工漫筆之一」(『広』「雷雨」第二期 民18・7・29)。

(18) 「演劇学校宣告解散耶」(『広』民18・5・12)。

(19) 「芸術戲劇行将出现」(『広』民18・5・11)、「『光明社』提前演劇」(『広』民18・5・15)。唐叔明「回憶南国社」(『中国話劇運動五十年史料集第一輯』中国戲劇出版社 一九八五 新版 所収)によれば、彼女も広州に残ったようだが、光明社に参加したか否かは不明。研究所の胡春冰と恋愛関係にあったという回想文もある(又)。

(20) 『広』民18・3・16。

(21) 宋春舫「(未来派劇本) 早已過去了」,「(未来派劇本) 槍声」(『戲劇』第一卷五号 一九二二年九月) 及び「未来派劇本」(『宋春舫論劇第一集』中華書局 一九二三) 参照。

(22) 「雷雨之後(二) 本社消息」(『広』「雷雨」第四期 民18・6・9) 及び口参照。

(23) 「改良戲劇研究会举行成立大会紀」(『広』民18・5・6)。

(24) 「取締淫劇」(『広』民12・9・11)、「教育局禁演淫戲」(『広』民15・1・26)。

(25) 「組織審查戲院委員會」(『広』民15・3・5)、「教育局開戲劇審查會紀」(『広』民15・3・17)。

(26) 「審查戲劇委員會會議紀」(『広』民15・6・9)。

(27) 「規定取締戲劇條例」(『広』民16・2・16)。參考までに、「取締新旧戲劇條例」の全文を引用しておく。

#### 取締新旧戲劇條例

第一條 凡在廣州市開演下列各種戲劇、皆受本條例取締、甲、凡南北戲劇之關於鑼鼓絃索歌舞者、乙、凡白話戲幻術戲及一切雜戲之不屬於甲項者。

第二條 市内劇場、須將劇本大綱、先期送交本局審查。

第三條 本局戲劇審查委員會委員、到各劇場視察、如認為有違犯本條例第四條之規定時、得向劇場警告及制止其一部或全部之表演。

第四條 各劇本之表演、不得違犯下列各項、(一) 有違黨義者、(二) 有辱國體者、(三) 有背人道者、(四) 有傷風化者、(五) 蔑視婦女者、(六) 阻碍進化者。

第五條 凡犯前條第一二項者、全都禁止、犯三四五六項者、按其情節之輕重、分別取締。

第六條、本條例自公布之日施行。

(28) 「禁演淫穢劇本」(『広』民17・3・27)。

(29) 「教育局禁演余美顏投江記」(『広』民17・6・13)。

(30) 「教育局審查戲劇之進行」(『広』民17・2・11)、「教育局審查戲劇近訊」(『広』民17・2・20)。

(31) 「市宣傳部擬組織廣州戲劇審查委員會」(『広』民18・8・7)、「審查戲劇委員會改組會議紀要」(『広』民18・8・27)。

(32) 「審査戲劇委員會第二次會議紀」(『広』民18・9・28)、「審査本市電影鑼鼓戲新辦法」(『広』民18・10・31)、「戲劇審委會四次會議錄」(『広』民18・11・3)、「市戲劇審委會第五次會議紀」(『広』民18・12・2)。

(33) 「教庁改良全省戲劇計劃」(『広』民17・11・30)。参考までに、「劇社戲班及電影公司立案章程」の全文を引用しておく。

劇社戲班及電影公司立案章程

第一條 凡在広東省内設立之劇社戲班、及電影公司(製片公司在内)、須經広東省教育庁立案。

第二條 凡劇社戲班、及電影公司、呈候立案時、應由該団体負責人備具呈文、填寫製定表式、及附屬書類、逕呈教育庁、其在各縣市者、呈由県市教育庁、或県署教育課、轉呈教育庁、當轉呈時須詳細調查、開具意見、以備審核。

第三條 呈請立案之劇社戲班、及電影公司、須將下列各項、詳細列明、一、名稱、二、宗旨、三、戲劇種類、四、所在地、五、負責人姓名住址、六、組織、七、劇員人數、八、成立時期。

第四條 凡劇社戲班、及電影公司、呈請立案後、須經教育庁派員就地調查、認為合格者、力准立案、其在各縣市者、由県市教育庁、或県署教育課、派員負責辦理、但須將辦理調查結果、詳細開列呈報、以憑核辦。

第五條 凡已立案之劇社戲班、及電影公司、如違犯教育庁改良戲劇規程第四條時、得由教育庁撤銷其立案。

第六條 凡已立案之劇社戲班、及電影公司、如有變更、或停辦時、須呈教育庁核准、其在各縣市者須呈由県市教育庁、或県署教育課、轉呈教育庁核准。

第七條 本章程如有未盡時宜、由教育庁隨時修訂之。

第八條 本章程自公布日施行。

(34) 「改良戲會之進行」(『広』民17・11・16)。

(35) 黃節「一年來広東之教育」(『広』民18・1・1)。

- (36) 「改良戲劇研究会將開幕」(『広』民18・4・25)、「改良戲劇會開幕游芸之種類」(『広』民18・4・26)、「改良戲劇會近訊」(『広』民18・4・28)、「改良戲劇研究会舉行成立大會」(『広』民18・5・1)、「改良戲劇會今日成立」(『広』民18・5・4)、「改良戲劇研究会舉行成立大會紀」(『広』民18・5・6)。
- (37) 「改良戲劇研究会劇芸班昨行開學禮」(『広』民18・9・4)。
- (38) 閻折梧「一年來之上海戲劇界」(上海『民國日報』「電影國慶增刊」民17・10・10)。
- (39) 「中央宣傳部規定藝術宣傳辦法」(『広』民18・7・29)。
- (40) 「教局批准民聲劇社備案」(『広』民18・7・30)。
- (41) 「反俄宣傳週藝術宣傳」(『広』民18・11・14)、「反俄宣傳週藝術表演」(『広』民18・11・19)。
- (42) 「元旦日公開表演改革風俗劇」(『広』民18・12・27)。